

蟹満寺縁起

岡本綺堂

青空文庫

登場人物

うるま おきな
漆間の翁

うば
嫗

娘

里の青年
わかもの

(坂東三吉)

蟹

蛇

蛙

里のわらべなど

(一)

時代は昔、時候は夏、場所は山城国。久世郡くぜのこおりのさびしき村里。舞台の後方はすべて蓮池にて、花もひらき、葉も重なれり。池のほとりには柳の立木あり。

(男女の童三は唄い連れていず。)

唄 蛙釣かえるろうか、蟹釣ろうか、蓮をかぶった蛙を釣るか、はさみを持った蟹釣るか。

(三人は池にむかつて手をたたきながら、一と調子はりあげて又唄う。)

唄 蛙釣るか、蟹釣るか。水にとび込む蛙を釣るか、穴にかくれた蟹釣るか。

(わらべ等は唄い終りて、更にはじめの唄をくり返しつつあゆみ去る。水の音しずかにきこゆ。蓮の葉をかき分けて、小さき蛙は頭に大いなる蓮の葉をかぶりておどいず。)

蛙 ええ、さうぞうしい餓鬼共だ。子供くもというものはなぜああ騒ぎたいのだろう。いや、そう云えば俺だつて子供だ。陰くもつてあたたかい静かな晩などは、なにか一つ唄ってみたいような気がして、精一ぱいの大きな声を出して、あたり構わずにぎやあぎやあ呶鳴ること

もあるから、あんまり人間の悪口も云えまいよ。いたずらっ児ももう行ってしまったようだ。おれも一番陽気に唄ってやろうか。

（蛙はあたりを見まわして、唄いながら踊る。）

蛙 人を釣ろうか、こどもを釣るか。死んだ振して子供を釣るか。……ああ、面白い、面白い。

（蛙は蓮の葉を地にしきて坐す。柳のかげより大いなる赤き蟹いず。蟹は武装して、鋏のごとき刃をつけたる長^{なが}刀^{なた}を携えたり。）

蛙 やあ、蟹の叔父さんだね。

蟹 人間の子供もそうぞうしいが、おまえも随分そうぞうしいな。あけても暮れても騒いでいる。蛙の子は蛙とはよく云ったものだ。おれ達を見習ってちっと黙っている。

蛙 蟹の叔父さんのように黙っていると、おらあ病氣になつてしまうよ。こうして時々にお^{おか}陸へあがつて来て、唄ったり踊ったりするのが何よりの楽しみなんだ。

蟹 陸には怖いものがあるのを知らないか。

蛙 人間の子供なんか、怖いものか。あいつ等がつかまえに来れば、おらあすぐに水に飛び込んでしまうから大丈夫だ。

蟹 おまえ達には人間よりもつと怖いものがあるぞ。

蛙 なんだろう。（考える。）むむ。蛇か。

蟹 その蛇だ。蛇は人間よりも足がはやい。木のかげや草のあいだに隠れていて、お前たちの姿を見付けると、不意にするすると駆けて来て、あたまから一と呑みに呑んでしまうぞ。蛇はおまえ達に取つては何よりもおそろしい敵だ。蛇にみこまれたが最後、とても逃がれることは出来ないのだから、そのつもりで用心しろ。

蛙 蛇はそんなに強いかねえ。

蟹 おまえ達よりも確かに強い。

蛙 じゃあ、叔父さんだつてかなわないだろう。

蟹 いや、おれはこの通り頑丈な甲よろいで身をかためている。おまけにこういう鋭い武器をもっているから、蛇の方で却つて怖がるくらいだ。

蛙 なるほど叔父さんは強そうだね。おらあこの通り小さいから弱いのだ。

蟹 それだから早く大きくなれ。大きくなつて強いものになれ。お前だつて強くなれば、小さな蛇ぐらいはあべこべに呑んでしまうことができるのだ。おれも昔は弱いものであつた。敵を見るとすぐ逃げて隠れたものだけれども、今はこんなに大きい強い者になったか

ら、大抵の敵が来たって驚きはしない。こっちから向って行つて、鋏でチョン切つてしまふのだ。俺ばかりではない。どこの世界でも強いものが勝つのだ。

蛙 じゃあ、叔父さん、強い叔父さん。もしもここへ蛇が来たら、おまえ後生だから助けてくれないか。

蟹 よし、よし、俺がきつと救つてやるから、安心して遊んでいろ。おれはあの木のかげへ行つて、甲羅こうらをほしながら午睡ひるねをしているから、なにか怖い者が来たら、すぐに俺をよべ。いいか。

蛙 おまえが加勢してくれれば安心だ。じゃあ、頼むよ。

蟹 よし、よし。

（蟹は再び柳のかげに入る。）

蛙 さあ、蟹の叔父さんが味方をしてくれるから大丈夫だ。もう少しここで遊んでいようか。や、向うから誰か来るようだぞ。蛇やいたずらっ児とは違つて美しい娘だ。俺をひどい目に逢わすようなこともあるまい。平気で唄でも唄っている。いや、そうでない。人は見かけに寄らぬものだ。まあ、一旦は隠れてた方が無事かも知れない。

（蛙は池にとび込みて、蓮の葉のかげにかくれる。漆間うるまの翁の娘、衣きぬを洗わんとていず。）

娘 きょうもどうやら陰くもつて来た。降らないうちにこの着物を洗って置こうか。（池をのぞく。）おお、池の水も澄きんでいる。

（娘は池のほとりに立寄りて衣きぬを洗う。蛙の声きこゆ。）

娘 おお、蛙が面白そうに唄うたっている。わたしも負けない気になって唄おうか。いや、いや、どこにどんな人がいまいものでも無い。人に聞かれたら恥かしい。まあ、まあ、黙もくって洗いましょう。

（蛙はしきりに鳴く。娘は衣きぬを洗いおわる。）

娘 まあ、これでよし。その枝にかけて乾ほして置きましよう。

（娘は柳の樹に衣きぬをかけて去る。蓮の葉をかき分けて、蛙は再びいず。）

蛙 あの娘も遠慮せずにか何か唄うたえばいいのに……。おれ達のは唄うと云つても、唯むやみに呶鳴うなるのだが、ああいう美しい娘の喉のどからは、さだめて鈴のような可愛らしい声が出るだろう。どうかして一遍聞きたいものだ。時に蟹の叔父さんはどうしたろうな。相変らず口から泡をふいて高いびきで寝ているのだろうな。（柳の蔭をのぞく。）なるほど、強いものは違ったものだ。こんなところでもいい心持そうに寝ているな。一体、きょうは風も吹かず、日も照らず、なんだか薄ら眠いような日和だ。おれもさつきから唄いくたびれたか

ら、ここらで一と寝入りやらかすかな。これを頭にかぶっていれば、誰もちよいと気がつくまいよ。

（蛙は蓮の葉をかぶりて寝る。蛇いず。頭には蛇をいただきて、身には鱗の模様ある衣きぬを被たり。）

蛇 このごろは蛙もなかなか利口になって、遠くからおれの姿を見ると、すぐに水へ飛び込んでしまうから、容易にこっちの口へ入るようなことがない。なんでも油断していると、ころを不意に飛び付いて、一と息に呑んでしまわなければならないのだ。（云いつつかの蓮の葉に眼をつける。）や、あの蓮の葉がおかしいぞ。どれ、どれ。

（蛇は進んで蓮の葉のそばへ行き、足にて軽くうごかせば、蛙は葉のあいだより顔を出し、蛇を見るよりはつと縮まる。）

蛇 案じょうの定、こんなところに隠れていた。さあ、もう逃がしはしないぞ。おとなしくしていろ。

（蛙は葉をかぶりしまま逃げんとす。）

蛇 ええ、逃げてても駄目だぞ。おれにみこまれたらもう一と足でも動けるものか、はははははは。

（蛙は小さくなりてうずくまる。蛇はしずかにねらい寄る。蛙は這いながら逃げまわる。以前の娘又もや衣きぬをかかえていず。）

娘 どうしても明日あしたは雨らしい。降らないうちにもう一枚洗って置こう。（云いつつ歩み来たりしが、このていを見るより走り寄る。）まあ、待ってください。可哀そうにこんな小さな蛙をどうするのです。

蛇 どうするといって、強いものに出逢つた弱い者の運命は大抵きまっているのだ。

娘 でも、あんまり可哀そうで……。まあ、御らんなさい。あんなに小さくなつてふるえていますよ。

蛇 今にふるえることも出来なくなるのだろう。

娘 後生ごしょうですからその蛙を堪忍してやってくださいな。今わたしがあの着物を洗つていたときに、面白そうに唄つていたのはきつとあの蛙でしたよ。

蛇 そうかも知れない。誰でも運命の手に掴まれるまでは、なんにも知らずにいるものだ。娘 なんにも知らずにいる者を殺すのはあんまり可哀そうでしょう。無慈悲でしょう。

蛇 可哀そうでも仕方がない。今もいう通り、弱いものは強い者に吞まれるのだ。おれが決めたのではない、神様がそう決めたのだ。

娘 でも、あんまりむごいことを……。

（蛙は救いを求むるがごとくに、娘の袖のかげに隠れる。）

娘 後生だからこの蛙を助けてやって下さいな。わたしが頼みますから……。

蛇 おまえが頼むか。

娘 この通り、拝みますから。

蛇 よし、ゆるしてやろう。

娘 ほんとうですか。まあ、嬉しい。（蛙にむかいて。）さあ、お前、早くお逃げよ。これにこりて、もううつかりと陸^{おか}へ上がるんじゃないよ。

（蛙は喜びて早々に池へ逃げ去る。）

娘 御覧なさい。あの通り喜んで逃げて行きましたよ。ああ、わたしはほんとうによい功^く徳^{どく}をしました。

蛇 お前はほんとうに善いことをした。

娘 こんな嬉しいことはありません。

蛇 それでおれはお前のたのみをきいた。その代りにお前もおれの頼みをきくだろうな。

娘 お前の頼みというのは……。

蛇 おまえの婿になりたい。

娘 え。

蛇 おまえのような美しい女の婿になりたいのだ。

娘 でも、親達が承知しないでは……。

蛇 親達などはどうでもよい。おれはお前と約束したのだ。

（娘は恐れて黙す。）

蛇 おまえの家はちゃんと知っている。今夜、酉とりの刻の鐘が鳴るのを合図に、おれはお前のところへ婿入りするのだ。いいか、忘れるなよ。

（云い捨てて蛇はしずかに歩み去る。娘はしばらく茫然としている。）

娘 さあ、大変なことになってしまった。あの蛇がわたしのところへ婿に来る……。まあ、どうしたらよからう。蛇は執念が深いというから、一旦みこまれたが最後、どこまでもわたしに付きまといて来るに相違ない。あの蛇が……。あのおそろしい、いやらしい蛇がわたしのところへ婿に来る……。ええ、かんがえてもぞつとする。わたしがもつと強ければ、蛇なんか幾匹押し掛けてたつて、門かどぐち口から追い払ってしまうのだけれども、わたしは女だ……。弱い女だ。おとっさんやおつかさんも年をとっている。わたしの家には強いものは

一人もないのだ。こうと知ったらあの蛙を救ってやるのではなかったものを……。ああ、わたしは飛んだことをして、飛んだものにみこまれてしまった。

（雨少しくふりいず。娘は空をあおぐ。）

娘 いつの間にか雨が降って来た。（柳にかけたる衣きぬをはずす。）今夜はきつと雨が降って、暗いものすごい晩に相違ない。おそろしい蛇が……執念ぶかい蛇が……どんな姿をして来るだろう。（身をふるわせる。）ああ、どうしたらよからう。ここで泣いていても仕様がな。ともかくも早く家へ帰って、おとっさんやおつかさんと相談するよりほかはあ
るまい。早くそうしましょう。

（娘は二つの衣きぬをかかえ、しおしおとあゆみ去る。柳のかけより蟹いず。）

蟹 いい心持で午睡ひるねをしている枕もとで、泣いたり笑ったり、がやがや騒ぐので、すっかり眼がさめてしまった。あの蛙め、早くおれを呼び起せばいいのに、蛇にみこまれてふるえ上がって、もう声も出なくなつたのだろう。ほんとうに弱い奴だ。（あざわらう。）しかし又、あの娘さんもあんまり無考えだな。いくら蛙が可哀そうだといって、自分も弱い女の癖に、うっかり差し出るからこんなことになるのだ。

（蛙の声きこゆ。）

蟹 蛙の奴め。自分の代りにあの美しい娘を人身御供^{ひとみごくう}にして置きながら、平気で面白そうに唄っているが、娘の家では今ごろ大騒ぎをしているだろう。可哀そうなものだな。

(二)

おなじ里、漆間^{うるま}の翁の宿。舞台にあらわれたる家の中はすべて土間にて、奥の間には古き簾^{すだれ}を垂れたり。上のかたに大いなる土竈^{どべつちい}ありて、消えかかりたる藁^{わら}の火とろとろと燃ゆ。土間には坐るべき荒むしろと、腰をかくべき切株などあり。ほかに鋤^{すき}鋤^{くわ}の農具あり。打ちかけたる藁屑^{もくず}など散乱す。下のかたには丸太を柱としたる竹門あり。門の外には大樹あり。樹の間がくれにかの蓮池遠くみゆ。

(白髪の翁と姫は竈のまえに語る。)

姫 どうも困ったことが出来^{しゅったい}したが、お前さんはまあどうするつもりだね。

翁 どうするといつて、これも因果とあきらめるよりほかはあるまい。

姫 あきらめられるお前さんはしあわせだ。わたしにはどうしてもあきらめられない、十

七のとしまで大事に育てた、かけがえの無いひとり娘を、おそろしい蛇の人身御供にするのを黙ってあきらめていられるお前さんは、ほんとうに羨ましい。

翁 ええ、もう泣いてくれるな。おれだつて人間だものを……。可愛い娘が蛇にみこまれたと思えば、おそろしいやら悲しいやらで、涙が胸一杯にせき上げて来るのを、齒をくいしばつてじつと我慢しているのだ。そばでお前に泣かれると、俺ももう我慢ができなくなる。まあ、仕方がない。あきらめろよ。

姫 どう考え直しても、わたしには我慢もあきらめも付かない。まあ、なんたる情けないことだろう。あんな美しい可愛い娘を……。

翁 もう、もう、止してくれ。後生だから……。無い昔とあきらめてくれ。

姫 いっそ無い昔なら苦労もなかったろうが、夫婦が四十を越すまで子というものが無いのをかなしんで、弁天様に三七日の願をかけたら、その奇特きとくであんな美しい娘が生まれた。やれ、嬉しやと手塩にかけて生長させ、近いうちに相当の婿を取つて、わたし達もまず安心しようと思つて……。

翁 とんでもない婿が出来た。(つぶやく。)

姫 ほんとうに、飛んでもない災難が降つてわいて、大事の娘を蛇に取られる。かんがえ

てもぞつとして身の毛がよだつような。もし、なんとかして娘を助ける工夫は……。ああ、わたしはもう気がいになりそうになって来た。

（夫のそばにすり寄る。翁はじつと頭^{かしら}を垂れている。）

翁 まあ、騒いでくれるな。きちがいになるなら、おれの方が先になる筈だ。弁天様にお願い申して出来た子だから、蛇にとり返されるのも自然の約束だろうよ。蛇は弁天様の使わしめだ。

姫 そう云いながら、お前さんだつて泣いているじゃあないか。

翁 さつきから泣くまいと一生懸命にこらえているのに、おまえがそばからいろいろな愚痴を云うので、おれも我慢が出来なくなつて来たのだ。

姫 やせ我慢をしないで、泣きたいだけ泣いた方がいい。子を取られて泣く親のなみだが、神様のお目にとまって、思いもよらぬ御救いがないとも限らないから……。

翁 なんの、神様も仏様もあつたものじゃあない。あてにもならないことをあてにしているうちに、時は猶予なくなつてゆく。酉の刻にはもう半^{はんとき}晌もあるまいよ。

（翁はうつむきて嘆息す。姫も泣く。奥の簾をにかけて娘いず。）

娘 おふたりともにもう泣いてくださるな。わたしは覚悟をきめています。

姫 おお、娘……。〔走り寄って娘を抱く。〕おまえの覚悟は決まっても、わたし達の覚悟は容易にきまるものじゃない。どうしても怖ろしい婿は来るかねえ。

娘 酉の刻の鐘を合図に、きつと来ると云いました。

翁 その鐘もやがて鳴るであろう。

姫 お前は一体なぜそんな約束をしたのだ。蛇が蛙を呑むのはあたりまえのことだから、構わずに打ちやっておけばいいのに……。

娘 あんまり可哀そうでしたから、つい助けてやる気になったのですが、今更思えばそれが悪かったです。わたしもやっぱり蛙と同じように、弱い者であったのです。

翁 おれも蛇よりは弱いのだ。

姫 この家には蛇より強いものはひとりも居ないのだ。

娘 弱いものを救うには自分が強い者でなければならないということを、今初めて学びました。自分をまもってゆくほどの力も無い者が、ひとを救おうとしたのはあやまりでした。もう仕方ありません。わたしは覚悟して時刻の来るのを待っています。

姫 待つていてそれからどうなるだろう。かんがえても怖ろしいことだ。

翁 むかしの稲田姫は八股やつまたの大蛇おうちに取られるところを、素盞すさのおのみこと鳴尊に救われたが、こ

こにはそんな強い男もあるまいよ。

嫗 それでもこのままに娘は渡されまい。約束の時刻になったなら、蛇がどこからはいって来られないように、四方の戸をしつかりと閉め切つて、夜の明けるまで張番をして居ようかと思うが……。

翁 でも、あしたの晩もまた来るだろう。

嫗 あしたも明後日あさっても、三日も五日も十日もとお、一と月も二た月も、毎晩強情に防いでいた

ら、いくら執念深い蛇でもあきらめて、しまいには来なくなるかも知れない。

翁 おまえがあきらめられぬと同じことで、むこうも容易にはあきらめまい。根こんくらべならやつぱり強い者の方が勝つわ。

（三人は顔を見あわせて嘆息す。里の青年わかもの一人、太刀をはき、弓矢をたずさえていず。）

青年 もし、もし。

翁 や、もう来たのか。

（嫗はあわてて娘を我がうしろに隠す。翁はうろろうろする中に、青年わかものは進み入りて顔を見合わせる。）

翁 おお、お前さんか。まあ、よかった。

青年 どうも飛んだことが 出^{しゅったい} 来したそうですね。

姫 では、もう知っていなさるのか。

青年 さつき娘御から聞きました。しかし御安心なさるがよろしい。その蛇が来たら私が退治してみせます。

翁 お前さんが退治してくれるか。

姫 ほんとうに蛇を退治してくださいさるか。

青年 わたしが素盞鳴尊になりましょう。私にはこの弓と矢があります。

翁 おまえさんは弓が上手かね。

青年 空を飛ぶ鳥でもかならず射落します。蛇が今夜ここへ襲つて来たら、まず一の矢でそのひかった眼を射透してみせます。二の矢でその咽喉を射ぬいて見せます。大丈夫だから御安心下さい。

姫 ありがとうございます。お前さんがその弓と矢で、おそろしい蛇を退治してくださいされば、娘も助かります。わたし達夫婦も助かります。娘、もう大丈夫だよ。おまえはきつと助かるから……。

娘 助かるでしょうか。

嫗 この人は強いのだよ。

娘 強いでしょうか。

青年 わたしは自分でも強いものと信じています。

翁 お前さんはほんとうに強そうだ。やれ、やれ、これでようよう安心した。

嫗 わたしもようよう落付いた。

娘 安心ができましたか。

翁 そんな心細いことを云うものではない。なんでも気を強くもっているよ。

（雨の音薄くきこゆ。人々は表を窺う。）

青年 おお、雨がまた降って来た。

翁 もう日が暮れるなあ。

青年 今のうちに弓の弦でも張^{つる}つて置こうか。

（青年は弓の弦を張る。翁は立寄つて見る。）

翁 なるほど、太い弦だ。これを強く張つて矢を放したら、鉄の鎧でも射透すだろう。

嫗 いくら大きな蛇でも急所を射られてはたまるまい。

（青年はほほえみながら弦^{つるうち}打二三度して、弓をかたえの壁に立て、更に太刀をぬきてす

かし視る。）

青年 この剣で蛇の頭を切るのです。
つるぎ

翁 おお、なるほど。これもよく切れそうな刀だ。

青年 この通りにとき澄ましてあります。

嫗 憎い蛇めをずたずたに切つてやりたいものだ。

（青年は太刀を鞘に収める。雨の音いよいよ烈し。）

翁 雨がだんだんに強くなつて来たぞ。

嫗 内も外も暗くなつて来た。

娘 風も少し吹き出したとみえて、草や木がざわざわ鳴っています。

青年 怪しい物の出そうな晩ですな。

（人々は顔を見あわせて、ようやく不安の念に襲わる。）

娘 もうやがて鐘がきこえるでしょう。

翁 むむ。

（人々は息をのんで待つ。やがて酉の刻の鐘きこゆ。）

嫗 おお、鐘が鳴った。

青年 鐘が鳴りました。

（鐘の音つづいてきこゆ。娘は思わず母にすがる。姫は娘を抱きよせて、あたりに眼を配る。翁は入口の門をしかとしめて錠をおろす。）

翁 こうして置けば大丈夫だ。いや、まだ裏口が不安心だ。

（翁はあわてて奥へ走り入る。）

姫 （声を低める。）蛇はいよいよ来るでしようか。

青年 来るでしよう。しかし御安心なさい。

姫 大丈夫でしようか。

青年 大丈夫です。

（翁は再び奥よりいず。）

翁 もう何処もかしこもすっかり閉めて来たから、大丈夫だ。家には鼠が潜り込むほどの隙間もないぞ。

（雨風の音きこゆ。娘は物におそわれたように叫ぶ。）

娘 あれ、あれ、門に……。

姫 （怖るおそる門をのぞく。）いや、外は真闇で、雨が降っているばかりだ。誰も来や

あしない。

娘 でも、なんだか蹙音あしが……。

嫗 しつかりおしよ。怖くはないよ。

青年 わたしがここにいます。

（しばしの沈黙。やがて一種の音して、わかもの青年の張りたる弓の弦は自然に切れる。人々おどろく。）

青年 や、弓の弦が切れた。

翁 あんなに太い弦が自然に切れた。

（人々は顔をみあわせてしばらく黙す。）

青年 どうも不思議なことがあるものだ。（考える。）弓が役に立たなければ、これで防ぎます。

娘 （又もや叫ぶ。）あれ、あれ。

嫗 なんにも来やあしないよ。

青年 わたしはこの剣を持っています。どんな魔物でも名剣の威徳にはかありません。これをじつと見ておいでなさい。自然に気が鎮まります。

（太刀を娘の前に差付けると、太刀は鑢ぎわより自然に折れる。今度は声を出すものなく、人々はただ黙して眼を見あわせ、いよいよ恐怖の念に襲われる。）

翁 ああ、駄目だ、駄目だ。おまえさんもやつぱり駄目だ。

（^{わかもの}青年は残念そうに折れたる太刀をながめて立つ。しばしの沈黙。蛇は衣冠を着け、優美なる姿にて奥よりあらわる。）

翁 ああ、婿が来た。

姫 え。（いよいよ娘を抱きしめる。）

蛇 約束の通り、婿に来たぞ。祝言の用意は出来ているか。

（人々答えず。）

蛇 酒の用意はあるだろうな。

翁 酒は沢山にたくわえてあるから、飲みたいだけ飲んでください。ほかにも欲しいものがあるならば、なんでも上げます。

蛇 それだから娘を貰いに来たのだ。

翁 その娘だけは……。どうぞ堪忍してくださいるまいか。

姫 ほかのことなら何でもききますから、どうぞこればかりは……。この通り、拝みます。

蛇 お前達はなんにも云わぬがよい。娘はとうに承知しているのだ。

青年 いや、その娘も不承知です。

蛇 お前もだまつている。今更故障を云うと、お前たちの為になるまい。これ、よく見ろ。おれの大きい眼はみがいた鏡のようにかがやいている。この眼で一度睨めば大抵のものは縮んでしまうぞ。おれの口には赤い舌が火のように燃えている。この口を一度あけば大抵のものは一と息に吞んでしまうぞ。もう一度よく見ろ。おれのからだには鉄のような鱗が一面に生えている。この鱗をさか立てると大抵の矢も刀もおすことはできないぞ。おれはこれほどの武器をもっているのだ。それを知らずに防ごうとするのは馬鹿な奴だ。

（青年わかものを見てあざ笑う。青年は太刀の柄をすてて、更に弦の切れたる弓を取りしが、容易いたずにかかり得ず、徒らに睨みいるのみ。）

蛇 さあ、娘。こつちへ来い。

（蛇は袖をあげて差し招けば、娘は母の手を放れてふらふらと歩みゆく。蛇は娘の手を取りて奥に入る。翁と嫗とは茫然としてそのあとを見送る。）

青年 残念だが仕方がない。私にはひとを救うほどの力がないのか。

（青年わかものは持ったる弓をなげ捨つ。やがて奥にて凄まじき物音きこゆ。）

翁 や、あの物音は……。

姫 娘が長い蛇に巻かれて苦しんでいるのではあるまいか。

翁 どうかして助ける工夫は無いかなあ。

（翁と姫とはうろうろして奥を窺ううちに、奥より蛇は髪をふり乱して走りいず。蟹は赤き甲をつけ、かの長刀ながなたを持ちて追い出ず。）

蟹 卑怯者め。逃げるな。

（蟹は長刀を揮ってかかる。蛇は口より火をふきて奮闘。遂に蟹のために切倒さる。）

翁 さすがの蛇も蟹にはかなわないと見えて、長い鋏でずたずたに切られてしまった。やれ、やれ、ありがたい。これでまず安心した。

姫 それにしても娘はどうしたろう。

（娘は奥よりいず。）

姫 おお、娘。無事でいてくれたか。

翁 おお、娘……。 （走り寄って娘を抱く。）

娘 おつかさん。

姫 助かったか。

娘 助かりました。おそろしい蛇にまき付かれて、どうなることかと思っていましたら、この強い蟹がどこからかはいつて来て、長い鋏で蛇を追いはらってくれました。

蟹 追い払ったばかりでない。二度とわざわざいをなさないように、この通り亡ぼしてしまつた。

青年 なるほど、お前は強いな。

蟹 おれは強い。強ければこそ弱いものを救つたのだ。弱い者が弱いものを救おうとするのは、泳ぎを知らぬ者が水に溺れたものを救おうとするようなもので、両方ともに沈んでしまふばかりだ。弱いものを救いたければ、自分がまず強いものになれ。おれのような強い者になつて、弱いものを救うのが自然の順序だ。弱い奴等ばかりが蛆虫のようになつて、口のさきで慈悲の情けのと騒いでいるばかりでは、いつまでたつても際限はてしがあるまい。所詮は強い者の世の中だ。みんなも精出して強くなれ。世間に強いものが多くなれば、弱いものは自然に救われるのだ。

青年 判つた、わかつた。わたしもこれから強くなろう。年寄りや女子供を救うのは若い者の務めだ。

蟹 弱い奴の千人よりも、強い奴の方が頼もしいのだ。しっかり頼むぞ。

青年 よし。私はおまえの見る前で、神に誓おう。

(青年^{わかもの}は投げ捨てたる弓を取り、ひざまずきて額にいただく。)

娘 わたしは命を助けられた恩がえしに、蟹のすがたを絵にかかせて、末代までも残るよう
うに、近所のお寺へ納めましょう。

翁 おお、いいところへ気がついた。蟹に救われた人間があるということを世間の人に知
らせるために、蟹の姿を絵にかかせて、お寺に納めて置くがよろう。

姫 やがてそれがお寺の名になって、山城^{やましろのくに}国に古蹟が一つ殖えるかも知れない。

蟹 そんなことはどうでもいい。用が済んだらおれは帰るぞ。

(蟹は長^{なが}刀^{なた}をたずさえて悠々と奥に入る。翁と姫と娘はそのうしろ姿を拝む。青年^{わかもの}は
腕をくみて考える。)

幕

(「大正演芸」大正二年二月号掲載／大正九年六月、神戸中央劇場で初演)

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣」 岡本綺堂妖術伝奇集」 学研M文庫、学習研究社

2002（平成14）年3月29日初版発行

初出：「大正演芸」

1913（大正2）年2月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2008年12月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蟹満寺縁起

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>